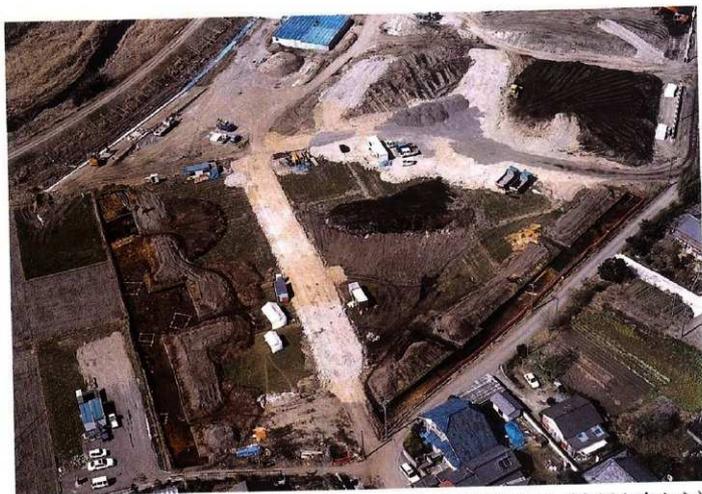


KI NO MAE SITE
木ノ前遺跡

—民間大規模小売店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



木ノ前遺跡全景（東側上空から）

2004年3月

宮崎県都城市教育委員会

序 文

この報告書は、民間の大規模小売店舗建設に伴い、都城市教育委員会が受託事業として実施した、都城市下長飯町に所在する木ノ前遺跡の発掘調査報告書です。

平成13年の12月から平成14年2月にかけて実施した発掘調査の結果、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が発見されました。

本書は、これらの文化財を記録として後世に伝えることを目的として作成しました。本書が、郷土の歴史を理解するための資料として活用されることを願っています。

最後に、発掘作業に従事していただいた作業員の皆様をはじめ、現場における調査や出土品の整理作業から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、多くの先生方に心より厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

都城市教育委員会
教育長 北村 秀秋

例 言

- 1 本書は株式会社タイヨー下長飯店店舗建設にともない、平成13年度に実施した木ノ前遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化課主事久松亮が担当した。
- 3 遺構実測図の作成は、作業員の協力を得て、都城市教育委員会文化課嘱託職員下田代清海・同主事横山哲英・米澤英昭・久松亮が行い、すべてのトレースは久松が行った。
- 4 本書に用いた方位は、座標北であり、レベルは海抜絶対高である。
- 5 本書に掲載した遺物実測図の作成は伊鹿倉康子・奥登根子・水光弘子・谷口和代・谷口菜穂子・徳楽有子が行い、トレースは久松亮が行った。なお、本書に掲載した石器の大部分の実測・トレースについては都城市教育委員会文化課主事補栗山葉子が行った。
- 6 遺構・遺物の写真撮影は、久松亮が行った。
- 7 空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
- 8 土器の色調は「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会談事務局監修）に拠った。
- 9 本書に用いた略記号は次の通りである。

SB - 掘立柱建物跡 SC - 土坑 SD - 溝状遺構

- 10 出土遺物・写真・図面記録等は、都城市文化課第1・第2分室および都城市文化財収蔵庫に保管されている。

本文目次

第1章	はじめに	
1	調査に至る経緯	1
2	調査体制	1
第2章	遺跡の位置と環境	2
第3章	調査の記録	
1	調査の概要	3
2	遺跡の層序	4
3	A区の調査	4
4	B区の調査	8
第4章	おわりに	25

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	グリッド配置図	3
第3図	基本土層図	4
第4図	A区横断土層図	4
第5図	A区包含層出土遺物実測図	5
第6図	A区土層断面図	6・7
第7図	A区遺構分布図	6・7
第8図	SB01・02実測図	8
第9図	SB03・04実測図	9
第10図	B区土層断面図	10・11
第11図	B区遺構分布図	10・11
第12図	SD01・SD02実測図	12
第13図	溝状遺構出土遺物実測図	13
第14図	SD03・04・05、SC01実測図	15
第15図	SD06・07・08実測図	16
第16図	SC02実測図	16
第17図	SC03・04・05・06実測図	17
第18図	SC06出土遺物実測図	18
第19図	B区包含層出土遺物実測図(縄文・弥生・古墳)	18
第20図	B区包含層出土遺物実測図(古代)	19
第21図	B区包含層出土遺物実測図(中世・近世・石器)	20

表目次

表1	A区包含層出土遺物観察表	5
表2	溝状遺構出土遺物観察表	14
表3	SC06出土遺物観察表	18
表4	B区包含層出土遺物観察表	21

図版目次

図版1	遺構写真1	26
図版2	遺構写真2	27
図版3	掲載遺物1	28
図版4	掲載遺物2	29

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

平成12年11月20日、株式会社タイヨーが都城市下長飯町に計画している大規模小売店舗（約23,000㎡）の建設に伴う埋蔵文化財の有無の照会が都城市教育委員会になされた。これに対し、同市文化課は平成12年12月7日から12月27日にかけて試掘調査を実施した。当該開発予定地は水田であり、中央部分から南側が段丘状に高く、北側は1～2mほど低くなっている。調査の結果、南側の段丘部では遺物包含層の遺存状況は良好で、古代から中世のかけての土器類や陶磁器、ピットや溝状遺構等を検出した。

株式会社タイヨーと都城市教育委員会で協議した結果、開発により掘削をうける浄化槽・新設道路・排水路の部分、約1,500㎡に対して記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、平成13年8月20日「下長飯町木ノ前遺跡埋蔵文化財に関する協定書」において、都城市が受託事業として平成13年12月から平成14年2月に発掘調査を実施、平成15年度に報告書を刊行すると取り決めた。

2 調査体制

発掘調査は以下の体制で行い、経費の運用は都城市教育委員会文化課であつた。

都城市教育委員会

教育長	長友久男（平成13年度）	北村秀秋（平成15年度）
文化課	課長 内村一夫（平成13年度）	井尻賢治（平成15年度）
	課長補佐 坂元昭夫	
	係長 奥田正幸（平成13年度）	矢部喜多夫（平成15年度）
調査担当	主事 久松 亮	
発掘作業員	岩切ユキ子 小山田福子 浦生ミツ子 曾原主吉 立山君子 津曲節子 徳丸ヒサ子 中原貞良 抜迫清美 野口虎男 肥後洋文 平山甲子郎 福丸ミサ子 藤井修子 藤田和子 藤田フサ子 南スミ子 宮元孝子 森英佐子 渡辺勇市	
整理作業員	伊鹿倉康子 奥登根子 新屋笑佳 水光弘子 谷口和代 谷口菜穂子 徳楽有子 前田町子 丸崎千鶴子	

第2章 遺跡の位置と環境

木ノ前遺跡は宮崎県都城市下長飯町261番地ほかに所在する。都城市は宮崎県の南西端、東は鰐塚山系、北西は霧島山系に囲まれた都城盆地のほぼ中央に位置している。都城盆地は、大淀川がその支流を集めながら南から北へ流れているが、当遺跡はその支流、萩原川と梅北川にはさまれた開析扇状地上の標高約140mの地点に位置している。なお、萩原川と梅北川は当遺跡のすぐ北で大淀川本流に合流している。

周辺の遺跡を概観すると、当遺跡と同じ梅北川右岸の開析扇状地に位置する黒土遺跡では、縄文時代晩期の土器と石器、弥生時代の住居跡、中世の道路状遺構や溝状遺構等が検出している。また梅北川左岸の台地上では、道路拡張工事の際に、後に「五十市式土器」と呼称される全縄文施文の完形土器が採集されている。同じ台地の北東端部の大岩田村ノ前遺跡では縄文・弥生時代の遺構や中世の道路状遺構の他、縄文から近世にかけての遺物が多数出土している。一方、萩原川と梅北川の大淀川への合流地点の左岸には、本市の名の由来ともなった都之城跡がある。



1.木ノ前遺跡 2.黒土遺跡 3.五十市式土器出土地点 4.大岩田村ノ前遺跡 5.都之城跡

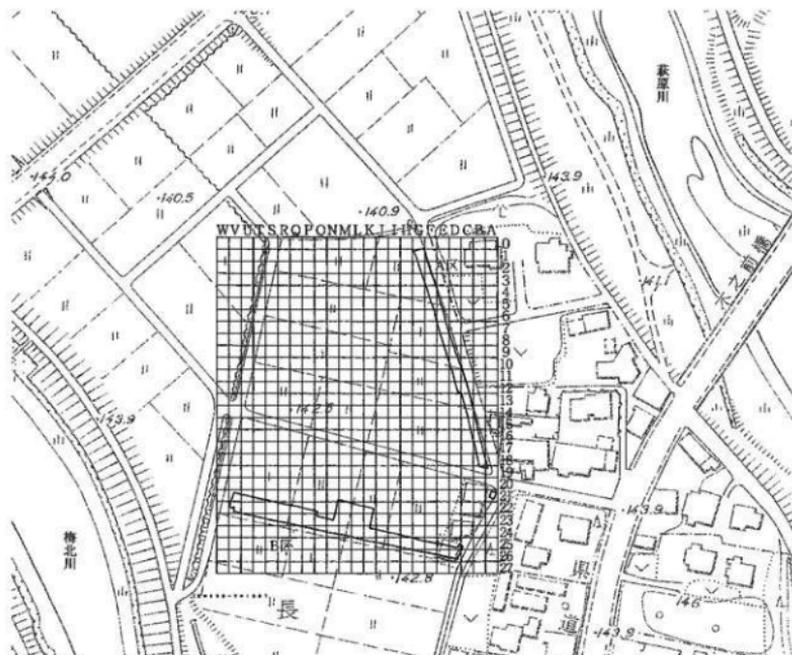
第1図 遺跡位置図

第3章 調査の記録

1 調査の概要

今回建設される店舗は、規模は大きいものの平屋であるため建設の際の掘削も浅く、店舗本体部分は地下の遺跡に影響を及ぼさない。よって、施工の際に破壊される浄化槽・新設道路・排水路部分の逆L字型の区域のみが調査の対象となった。なお、便宜上、南北方向に伸びる調査区をA区、東西方向に伸びる調査区をB区とした。当初計画ではA区とB区はつながる予定であったが、発掘調査と同時並行で店舗建設のための造成工事が開始されることとなり、そのための工事車両の進入路を確保しなくてはならなくなった。よって、進入路付近に2m四方のトレンチを設定して確認したところ、遺構・遺物とも確認できなかったため、調査区から除外した。

調査は重機にて表土剥いだ後、遺物包含層を人力にて掘り下げ、御池ボラ層上で遺構検出を行った。調査記録の為、5mグリッドを設定し、便宜上、東から西へアルファベットでA、B、C…、北から南へ算用数字で0、1、2、3…とし、その組み合わせで各グリッドを呼称した。通常、このようなグリッドを設定する際は10m間隔で設定するのが普通であるが、当調査区はA区・B区とも東西南北方向とは僅かにずれるため、10mグリッドではほとんど用を成さないと判断し、5mグリッドとした。

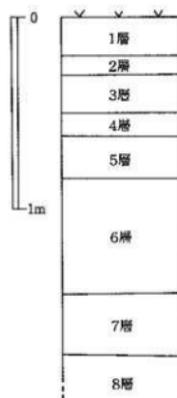


第2図 グリッド配置図

2 遺跡の層序

現耕作土の下、文明軽石（桜島起源の降下軽石、文明年間・15世紀後半に噴出）と御池降下軽石（霧島山系御池火口起源の軽石、約4200年前に噴出）にはさまれた黒色土層が遺物包含層である。遺物包含層は、その色調と軽石粒の含まれる割合から3層に分層した。御池降下軽石層の下は黒色の埋没腐植土層が続く。その下はアカホヤと呼ばれる火山灰層である。アカホヤは約6,500年前、九州南方約40kmに位置する鬼界カルデラの巨大噴火の際の降下火山灰である。

- 1層 灰オリープ色砂質シルト層（現耕作土）
- 2層 文明軽石層と暗褐色粘質土の混層
- 3層 暗灰褐色粘質シルト層
- 4層 灰褐色粘質シルト層
- 5層 御池降下軽石をまんべんなく含む黒褐色粘質土層
- 6層 御池降下軽石層
- 7層 黒色粘質シルト層
- 8層 アカホヤ火山灰層



第3図 基本土層図

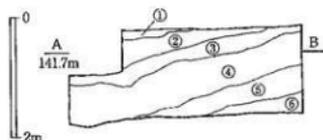
3 A区の調査

A区は、遺構検出面である御池降下軽石層上では東から西に急激に傾斜している（第4図参照）。また、A区の北側約3分の1では、表土の下が基本土層の第7～8層となり、御池降下軽石層は確認できない。これは近年の耕地整備により削平を受けたものと推測される。これらは、この地がかつて、北東に向かい緩やかに高くなっていたことを示している。このようにA区はかつて傾斜地であったため、生活の場としては適していなかったと考えられる。

検出できた遺構もピットのみであり、その検出数もB区に比較するとはるかに少ない。A区南端部で溝と土坑状のものを検出したが、埋土を確認したところ現代の道路工事等による攪乱であった。

遺物も石包丁のように希少なものを含め、B区同様に幅広い年代のものを検出しているが、その検出数はB区に比較するとはるかに少ない。

このような遺構と遺物の検出状況からも、A区はかつての生活圏の中心部ではなく、その辺縁部であったと考えられる。



- ①黄白色バミスをまんべんなく含む黒褐色粘質土層
- ②黄白色バミスをまばらに含む黒色粘質シルト層
- ③黄白色バミスを多量に含む灰褐色粘質シルト層
- ④御池降下軽石層
- ⑤黒色粘質シルト層
- ⑥アカホヤ火山灰層

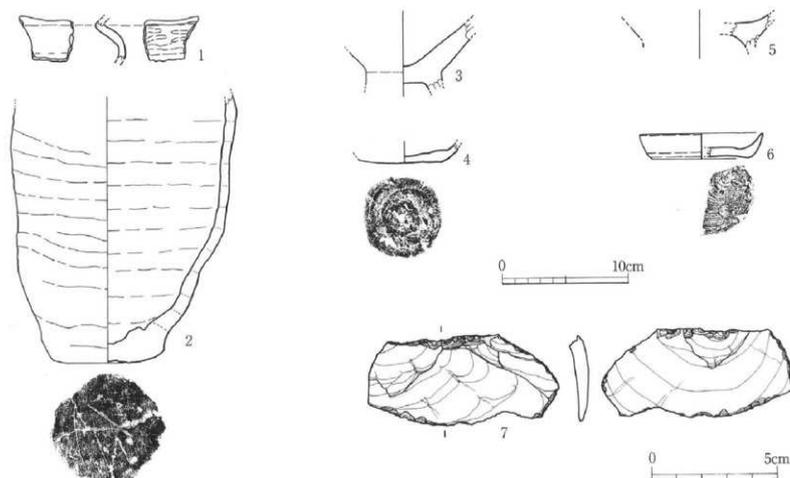
第4図 A区横断土層図

A区の包含層検出遺物

A区の遺物検出数は少なく、図化できるものはさらに限られるが、縄文から中世にかけての幅広い年代のものを検出している。また、そのすべてが御池降下軽石層（通称 御池ボラ）上の黒色土中より出土しており、御池降下軽石層が削平を受けている調査区北部からの遺物の出土は無かった。

2の壺は試掘トレンチより出土したものである。出土したトレンチの位置は、およそJ6グリッド付近で、A区に近いことからここに掲載する。古墳時代の土師器であり、輪積みの痕跡を明瞭に残している。また、接合しているため拓本では観察し辛くなっているが、底部には葉脈痕が観察できる。

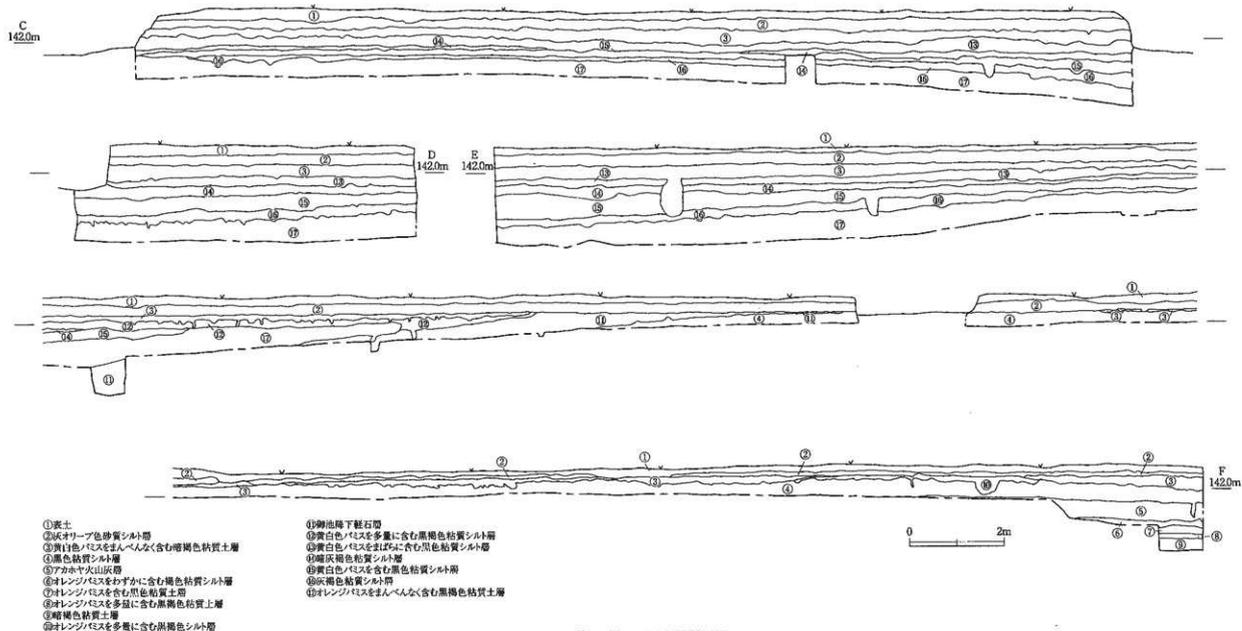
7の石器は調査区枠東側の断面中より検出したものである。前述のとおり、A区は遺構検出面の傾斜のため、調査区東側では遺物包含層が薄い。そのため他の調査地点とは違い、遺物包含層を分層することはできなかった。これはその包含層よりの出土遺物である。刃部に光沢があるが、観察の結果、これは稲科植物刈入れの際にできる使用痕では無いと判断された。



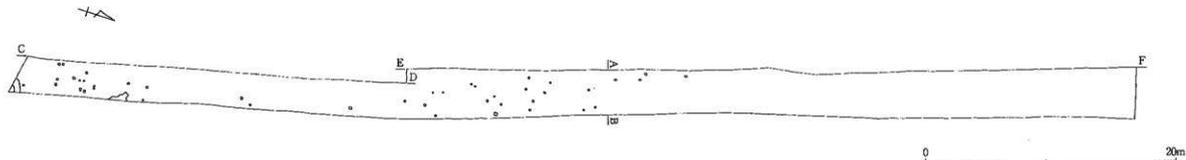
第5図 A区包含層出土遺物実測図

番号	出土地区	種別	器種	部位	層	色調		調整		備考
						内	外	内	外	
1	C14	縄文	壺?	胴部	3	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ミガキ	縄文晩期。
2	J6	土師器	壺	底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	古墳 輪積み痕明瞭。外器面にスス付着。底部に葉脈痕有り。
3	B18	土師器	高台付壺	底部	3	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ハケメ	古墳 全体的に磨耗している。
4	C14	土師器	椀	底部	3	浅黄橙	橙	ロクロ ナデ		古代 底部へラ起し。
5	A区	土師器	高台付壺	底部	3	橙	橙			古代 全体的に磨耗している。 (反転復元)
6	D10	土師器	皿	底部	5	にぶい橙	にぶい橙	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	中世 底部糸切り。
7	A区	石器								刃部に使用痕のような光沢有り。

表1 A区包含層出土遺物観察表



第 6 図 A 区土層断面図



第 7 図 A 区遺構分布図

4 B区の調査

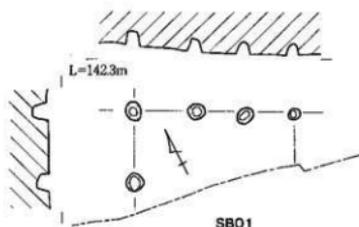
B区は、遺構検出面では東から西に向かい緩やかに低くなり、K25グリッド付近（SB03検出地点付近）でもっとも低くなり、そこから西に向かって緩やかに高くなっている。調査区のはほぼ全域から非常に多くの柱穴を検出したが、その柱穴群の中から掘立柱建物として確認できたのは4棟（SB01～SB04）のみである。うち2棟（SB01・SB04）は調査区南端に位置し、その全容は不明である。残り2棟についても、調査区外に広がる可能性は否定できない。

調査区西側にて8条の溝状遺構（SD01～SD08）を検出した。SD01は今回検出した遺構の中では最も規模が大きく、床面からは都城市内でも検出例の少ない木製品（下駄）が出土している。同じく調査区西側にて6基の土坑（SC01～SC06）を検出した。SC01はSD03に切られており、時代的にはこれに先行するものである。埋土の状況から、これらの土坑には時期差があるものと考えられるが、遺物を伴うものは縄文時代後期～晩期の土器片を検出したSC06のみであり、その他の土坑の時期については不明である。

遺物は縄文・弥生時代の土器もわずかに検出しているが、大部分は古墳時代から古代・中世にかけての土師器・須恵器である。特に古代の遺物は今回の調査にて検出した遺物の半数近くを占めている。その他にも中世・近世の陶磁器や、少数ではあるが石器も出土している。以下、遺構ごとに詳しく述べる。

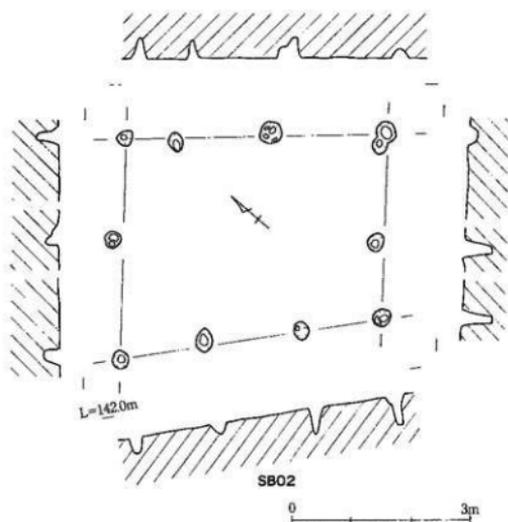
SB01

南側が調査区外へと続くために全容は不明であるが、おそらく東西棟の建物であると思われる。確認できる範囲では桁行3間（約2.8m）、梁間1間（約1.2m）以上である。直径30cm前後の柱穴によって構成される。時期は不明である。



SB02

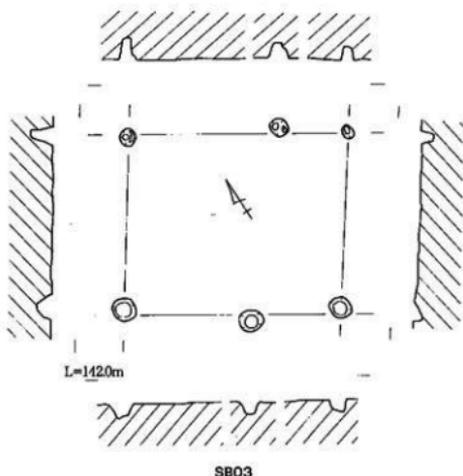
東西棟の建物で桁行3間（約4.3m）、梁間2間（約3.8m）である。梁間中央の柱は軸線より僅かに西側にずれている。直径30cm前後の柱穴によって構成される。相伴する遺物の出土は無く、時期は不明である。なおSB02を検出した地点の南側（K23、L23グリッド）からは、古代から中世にかけての土師器や須恵器が集中して出土している。



第8図 SB01・02実測図

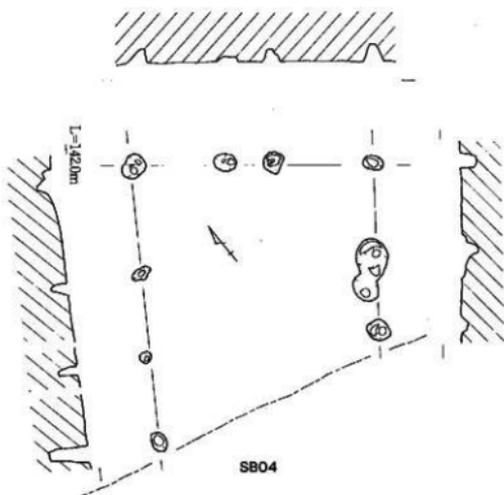
SB03

調査区南隅で検出した掘立柱建物跡である。確認できた範囲では南北約2.8m、東西約4mであるが、おそらく、この建物は調査区南側にさらに続いていると考えられる。建物の規模は桁行1間以上、梁間1間の南北棟の建物で、東西方向の柱穴の間隔から、西側には庇が付いていたのではないかとと思われる。柱穴の直径は20~30cmとばらつきがある。共伴する遺物の出土は無く、時期は不明である。

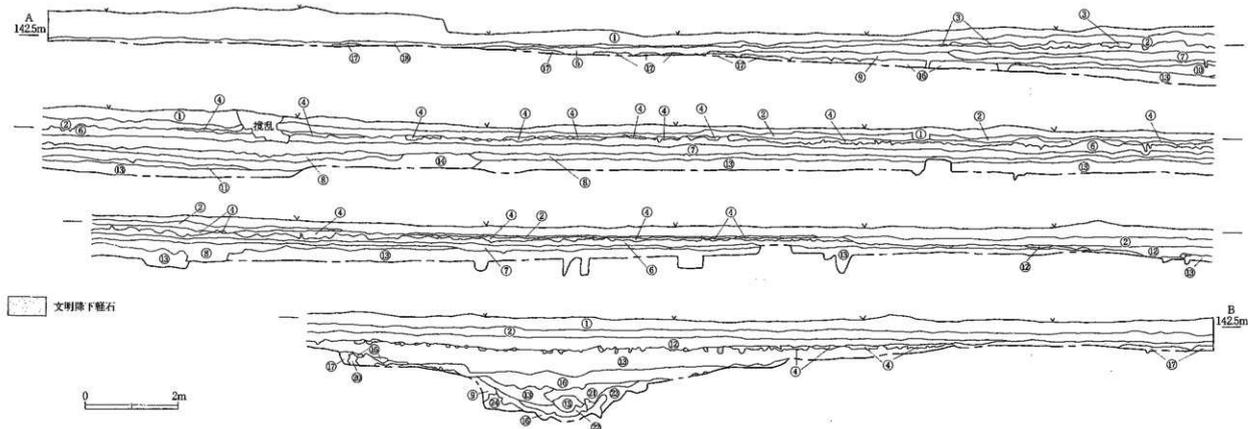


SB04

調査区南端で検出しており、SB01同様、全容は不明である。確認できる範囲では、桁行3間（約4.2m）、梁間3間（約5m）以上の南北棟の建物である。柱穴の規模は、切り合いもあり不明確なものもあるが、30cm以下の小ぶりなものが多い。柱穴からの遺物の出土は無く、他の掘立柱建物跡同様、時期は不明である。この建物跡を検出した調査区グリッドO23、O24近辺は包含層検出の遺物が多く、その年代は古代に集中している。

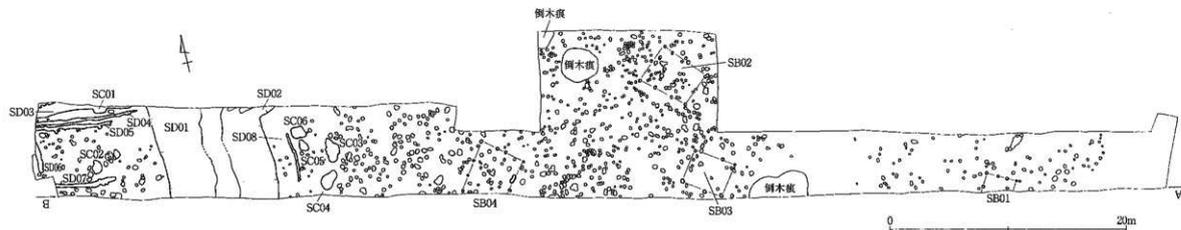


第9図 SB03・04実測図



- | | | |
|---------------------------|---------------------------|-----------------------|
| ①赤土 | ⑩黄白色/ビスをまばらに含む黒褐色粘質土層 | ⑬暗褐色粘質土 |
| ②灰ナリブ色砂質シルト層 | ⑪黄白色/ビスをこわすかに含む黒色粘質土層 | ⑭白/ビスをわずかに含む暗褐色粘質土層 |
| ③黄褐色砂質シルト層 | ⑫黒灰褐色粘質シルト層 | ⑮オレンジ/ビスをわずかに含む黒色粘質土層 |
| ④文明降下軽石と暗褐色粘質土の混層 | ⑬黄白色/ビスをまんべんなく含む黒色粘質土層 | ⑯オレンジ/ビスを多量に含む黒褐色粘質土層 |
| ⑤文明降下軽石層 | ⑭オレンジ/ビスをまばらに含む黒褐色粘質土層 | ⑰オレンジ/ビスを多量に含む暗褐色粘質土層 |
| ⑥黄白色/ビスをまばらに含む灰ナリブ色砂質シルト層 | ⑮黄白色/ビスをまんべんなく含む灰褐色粘質シルト層 | ⑱オレンジ/ビスを多量に含む暗褐色粘質土層 |
| ⑦黄白色/ビスをまばらに含む黒色粘質シルト層 | ⑯オレンジ/ビスを多量に含む黒褐色粘質土層 | |
| ⑧暗褐色粘質シルト層 | ⑰オレンジ/ビスを多量に含む黒褐色粘質土層 | |
| ⑨灰褐色粘質シルト層 | ⑱暗褐色粘質土層 | |

第10図 B区土層断面図



第11図 B区遺構分布図

SDO1

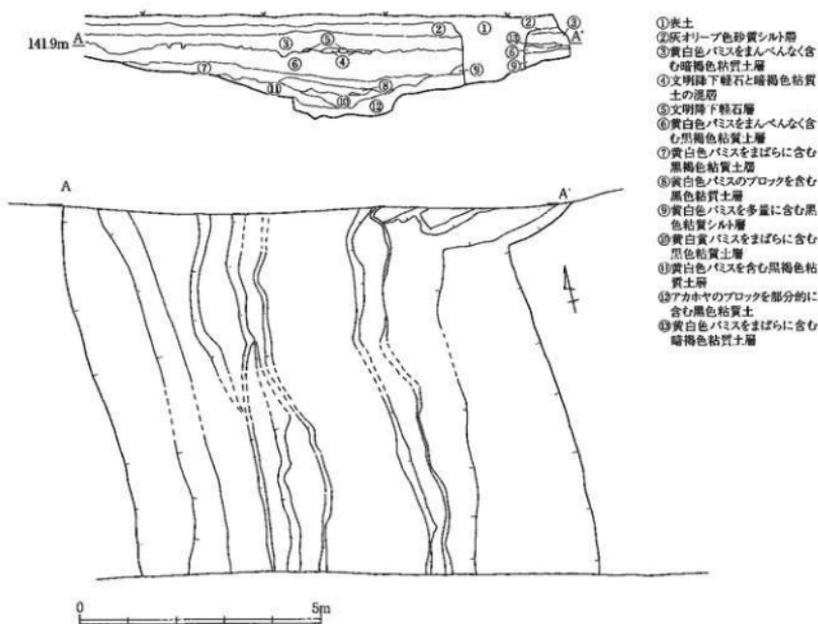
SDO1は溝幅約9m、検出面からの深さ約1.2mであり、今回検出した中で最も規模の大きい遺構である。調査区西側に調査区には直交して検出され、北側と南側が調査区外へと続いている。溝の断面形は遺構検出面から緩やかに傾斜しつつ、溝の中央付近で急激に落ち込み溝底となっている。

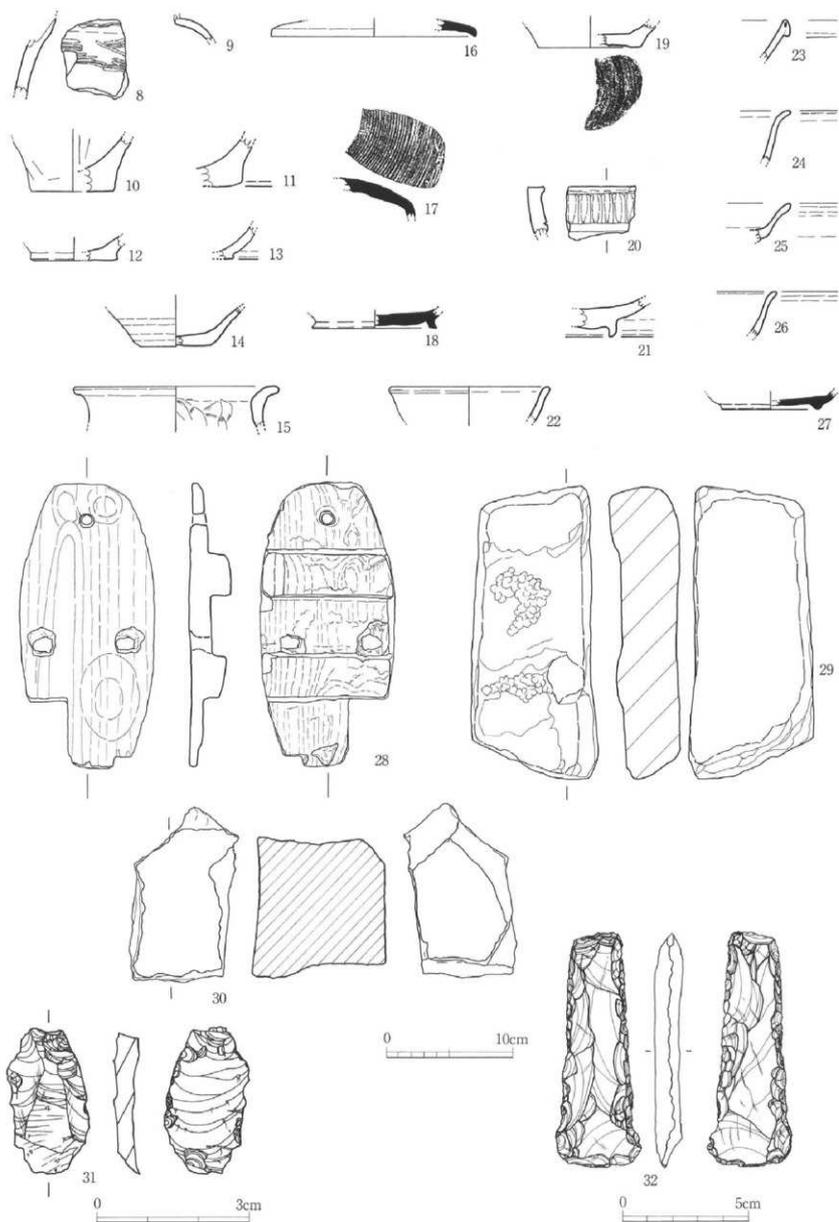
調査中は湧水に悩まされ、検出した形状からも水の侵食作用が窺える。これらから、この溝状遺構は水路か、もしくは堀のような性質をもっていたのではないかと考えられる。明確な時期は不明であるが文明降下軽石の堆積状況から、その噴出時期である15世紀後半までにはほぼ埋没していたと考えられる。埋土中から検出した遺物は、縄文晩期の土器の出土もあるが、そのほとんどが古代から中世にかけての遺物である。そのため、この溝状遺構が上記のような性質を有していたのは古代から中世にかけてであるとされる。この溝状遺構の周辺からは縄文晩期の土器を伴う土坑も検出しており、この溝状遺構がその当時から存在したのか、古墳時代から古代にかけてつくられたものかは、情報が限られているため判断は難しい。

埋土中より検出した遺物は、前述の縄文晩期の土器片のほか、時期不明の石器、最深部付近より出土した木製品（下駄）、古墳時代から古代・中世にかけての土師器や須恵器、中世の舶載陶磁器等である。

SDO2

SDO2はSDO1の北東部隅にそれとほぼ直交するように検出している。幅員・深さともに不明である。SDO1より先に存在していたことは、その埋土の堆積状況によりわかるが、上記のとおりSDO1の時期が明確ではなく、またSDO2埋土中より遺物の出土も無かったため、その時期は不明である。





第 13 图 沟状遗構出土遺物実測図

番号	出土 地区	種別	器種	部位	層	色調		調整		備考
						内	外	内	外	
8	SD01	縄文		胴部		橙	にぶい赤褐		ミガキ	上部に沈線文有り
9	SD01	縄文		胴部		明赤褐	褐灰		ミガキ	縄文晩期
10	SD01	土師器	甕	底部		灰白	にぶい橙	ナデ	ナデ	古墳
11	SD01	土師器	壺?	底部		にぶい黄橙	浅黄橙			古墳 全体的に磨耗が著しい
12	SD01	土師器		底部		浅黄橙	灰白			古代 全体的に磨耗が著しい (反転復元)
13	SD01	土師器	坏	底部		黄灰色	浅黄橙			古代 全体的に磨耗が著しい
14	SD01	土師器	坏	底部		にぶい橙	橙	ナデ	ロクロ ナデ	古代 (反転復元)
15	SD01	土師質 土器	壺	口縁		黄灰色	にぶい橙	ケズリ		古代
16	SD01	須恵器	壺	口縁		暗緑灰	暗青灰色	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	古代 (反転復元)
17	SD01	須恵器	蓋	甲部		灰白	褐灰	ロクロ ナデ	カキメ	古代
18	SD01	須恵器	高台 付坏	底部		灰白	灰白	ナデ	ヘラ ケズリ	古代 付け高台 (反転復元)
19	SD01	土師器	坏	底部		灰白	灰白	ナデ	ナデ	中世 底部糸切り
20	SD01	瓦質 土器	鉢	口縁		灰白	灰白	ナデ	ナデ	中世 火鉢
21	SD01	陶器	皿	底部					施釉	施釉 中世
22	SD01	青磁	碗	口縁					施釉	施釉 中世 船載
23	SD01	白磁	鉢?	口縁					施釉	施釉 中世 船載
24	SD01	青磁		口縁					施釉	施釉 中世 船載
25	SD01	青磁		口縁					施釉	施釉 中世 船載
26	SD01	青磁		口縁					施釉	施釉 中世 船載
27	SD06	須恵器	高台 付坏	底部		青灰	暗青灰色	ナデ	ナデ	古代 (反転復元)
28	SD01	木製品	下駄							SD01 最深部より検出
29	SD01	石器								SD01 最深部より検出 表面に敲打痕有り
30	SD01	石器	砥石?							SD01 最深部より検出 砥面有り
31	SD01	石器								黒曜石
32	SD01	石器	石筥							

表2 溝状遺構出土遺物観察表

SD03

B区北西隅で検出した東西方向に走行する溝状遺構で、そのすぐ南側にSD04・SD05が平行にはしている。溝幅約90cm、検出面からの深さ約40cmで、溝の断面形は立ち上がりの傾斜の緩いU字状である。北側・西側ともに調査区外に延びている。また、東側ではSC01を切っている。

溝底より軽石製品を検出したが、時期を特定できるような遺物の出土は無かった。

SD04

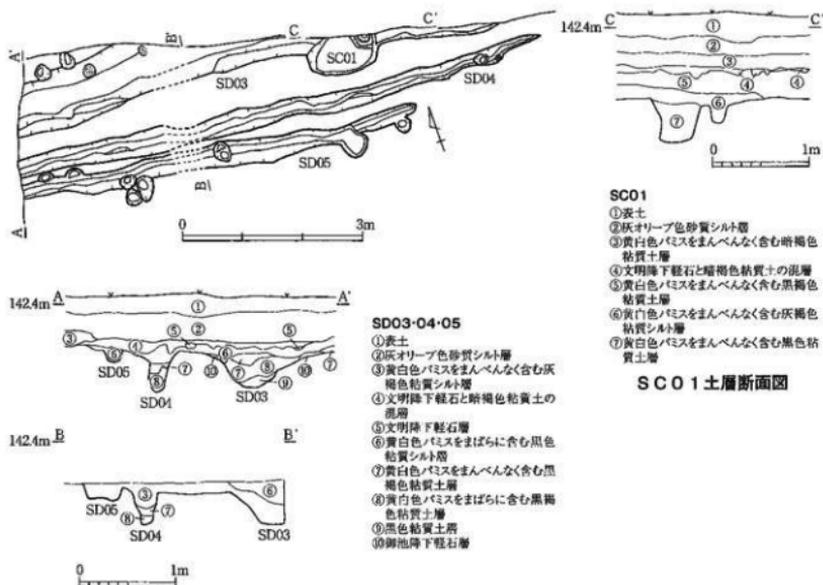
B区北西隅で検出した3条の溝状遺構のひとつで、SD03とSD05に挟まれるように検出した。溝幅約30cm、検出面からの深さ約40cmで、溝の断面形はU字よりもむしろV字に近い形状である。東側は徐々に細くなりながら、SD01の手前で途切れている。深さは東側に向かうにつれて浅くはなっているが、途切れる直前まで深さはそれほど変化しない。古墳時代から古代にかけての土師器片が少数出土しているが図化できるものは無かった。

SD05

B区北西隅で検出した3条の溝状遺構のひとつで、一番南側から検出した。溝幅35cm、深さ約10cmでSD03、SD04に比べて、掘り込みが浅い。埋土の状況から他の2条より新しいと考えられる。

SC01

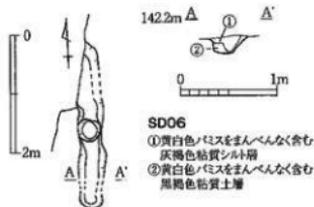
土坑はまとめて後述してあるが、SC01はSD01に切られているためここに記す。遺物の出土は無かったが、埋土と形状が縄文後期から晩期の遺物を検出したSC06に類似している。



第14図 SD03・04・05、SC01実測図

SD06

B区西隅で検出した南北方向に走行する溝状遺構で、北側は調査区外に延びている。溝幅約40cm、検出面からの深さ約20cmで、溝の断面形は緩やかなU字状である。ほぼ中央にビット状の落ち込みがある。埋土中より古代の須恵器（第13図、27参照）を検出している。

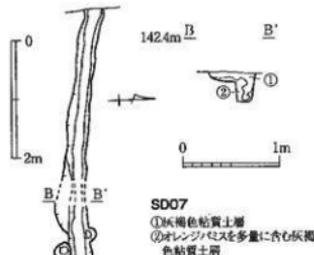


SD06

- ①黄白色ノヒスをまんべんなく含む灰褐色粘質シルト層
- ②黄白色ノヒスをまんべんなく含む黒褐色粘質土層

SD07

B区南西隅で検出した、東西方向に緩やかに屈曲しながら走行する溝状遺構で、西側は調査区外に延びている。溝幅約40cm、検出面からの深さ約30cmで、溝の断面形はU字状であるが、屈曲部の南側では一部テラス状の段差がみられる。川に向かう西側が若干、深くなっていることと、埋土の堆積状況から、この溝状遺構は排水の機能を持っていたのではないかと考えられる。

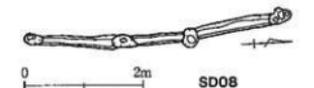


SD07

- ①灰褐色粘質土層
- ②オレンジヒスを多量に含む灰褐色粘質土層

SD08

SD01のすぐ東側に、それと平行に走行している溝状遺構である。その形状は、ほぼ等間隔にならぶ4つのビットをつなぐ溝状の落ち込みである。幅約20cm、深さは10cmにも満たない。遺構検出面で確認できたのは、4つのビットをつなぐ4m余りの区間のみであるが、その検出状況から、南北方向にさらに続いていくように感じられた。SD08から東は、ビットの密度、遺物の出土数が急激に増えていくため、古代から中世にかけて、なんらかの生活の場が存在したことは間違いない。SD01が水路もしくは堀のような性質のものであったと考えれば、SD08はそれと生活圏を区切るための溝の跡ではないかと考えられる。

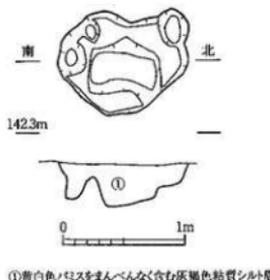


SD08

第15図 SD06・07・08実測図

SC02

B区西側、SD01の西、SD07のすぐ北側（調査区グリッドU23）で検出した土坑である。形状は楕円形に近いが、一部が欠けた、ややいびつなプランである。検出面からの深さは36cmで、西から南側にかけて3つのビットを伴っている。埋土の状況から古代から中世にかけてのものであると考えられるが、遺物の出土は無く、明確な時期、用途ともに不明である。



- ①黄白色ノヒスをまんべんなく含む灰褐色粘質シルト層

第16図 SC02実測図

SC03

B区の西側、SD01の東、調査区グリッドQ24で検出した土坑である。菱形に近い楕円形のプランで長軸2.1m、短軸1.2m、検出面からの深さは約30cmである。北側は階段状の段差を持ちながら緩やかに掘り込まれているのに対して、南側は底面まで一気に掘り込まれている。また南側に小規模なものを含む4つのピットを伴っている。埋土はSC02より古い層の土であり、古墳時代から古代にかけてのものであると考えられる。遺物の出土は無かった。

SC04

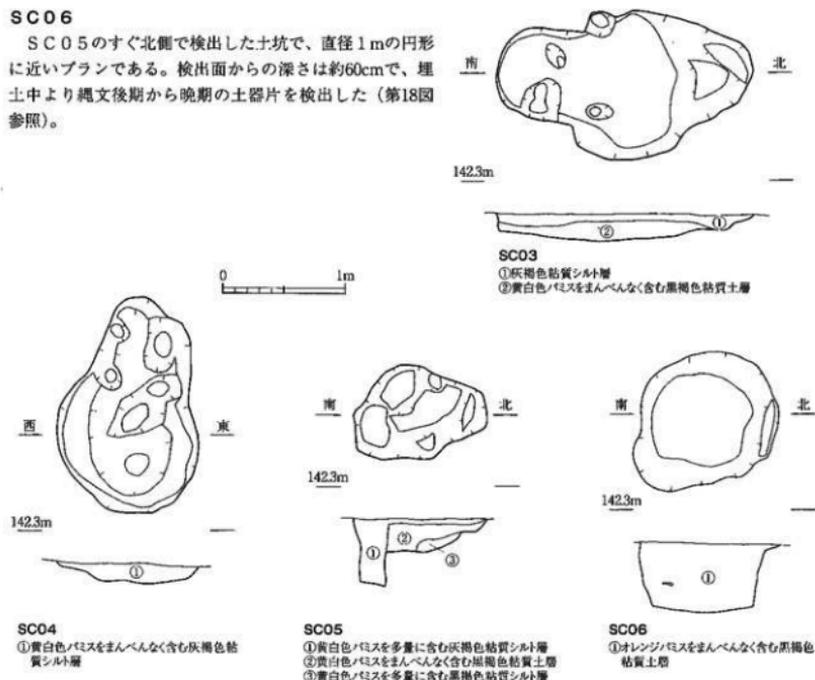
B区の西側、SD01の東、調査区グリッドR24で検出した土坑である。水滴の形に近い楕円形のプランで長軸1.8m、短軸0.8~1.2m、検出面からの深さは約20cmである。断面形は皿状で西側の傾斜は東側に比べて緩やかである。埋土はSC02と同じく古代から中世にかけてのものであると考えられる。

SC05

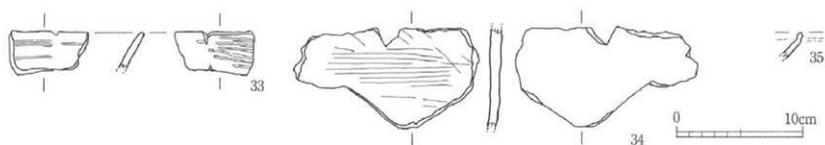
B区の西側、SD01の東、調査区グリッドR23で検出した土坑である。プランはSC04と似ているが、南側が後世のピットにより切られている。長軸1m、短軸0.5~0.8m、検出面からの深さは約25cmである。埋土はSC03とほぼ同じで、古墳時代から古代にかけてのものであると考えられる。

SC06

SC05のすぐ北側で検出した土坑で、直径1mの円形に近いプランである。検出面からの深さは約60cmで、埋土中より縄文後期から晩期の土器片を検出した(第18図参照)。



第17図 SC03・04・05・06実測図



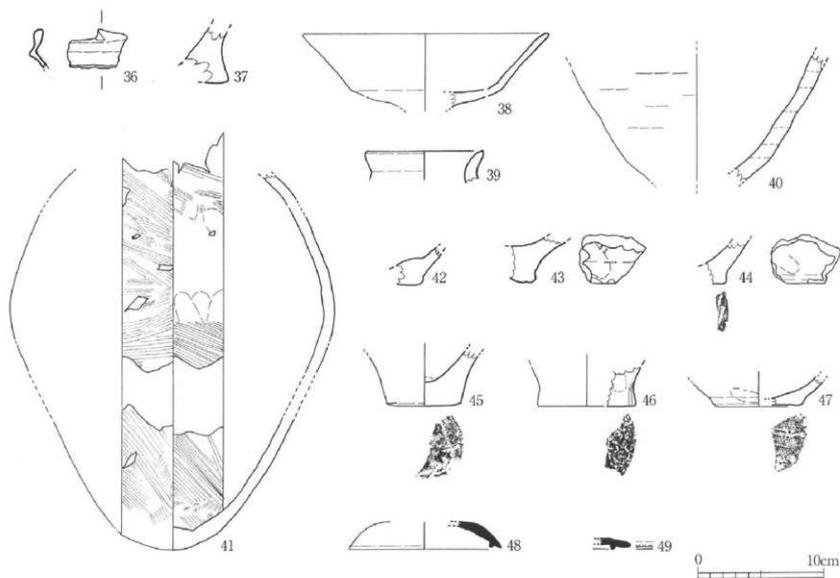
第18図 SC06出土遺物実測図

番号	出土地区	種別	器種	部位	層	色調		調整		備考
						内	外	内	外	
33	SC06	縄文		口縁		にぶい褐	にぶい褐	ミガキ	ミガキ	縄文後期
34	SC06	縄文		胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	縄文晩期 外器面にスス付着
35	SC06	縄文		口縁		黄橙	黄橙	ミガキ	ミガキ	縄文晩期 沈線有り

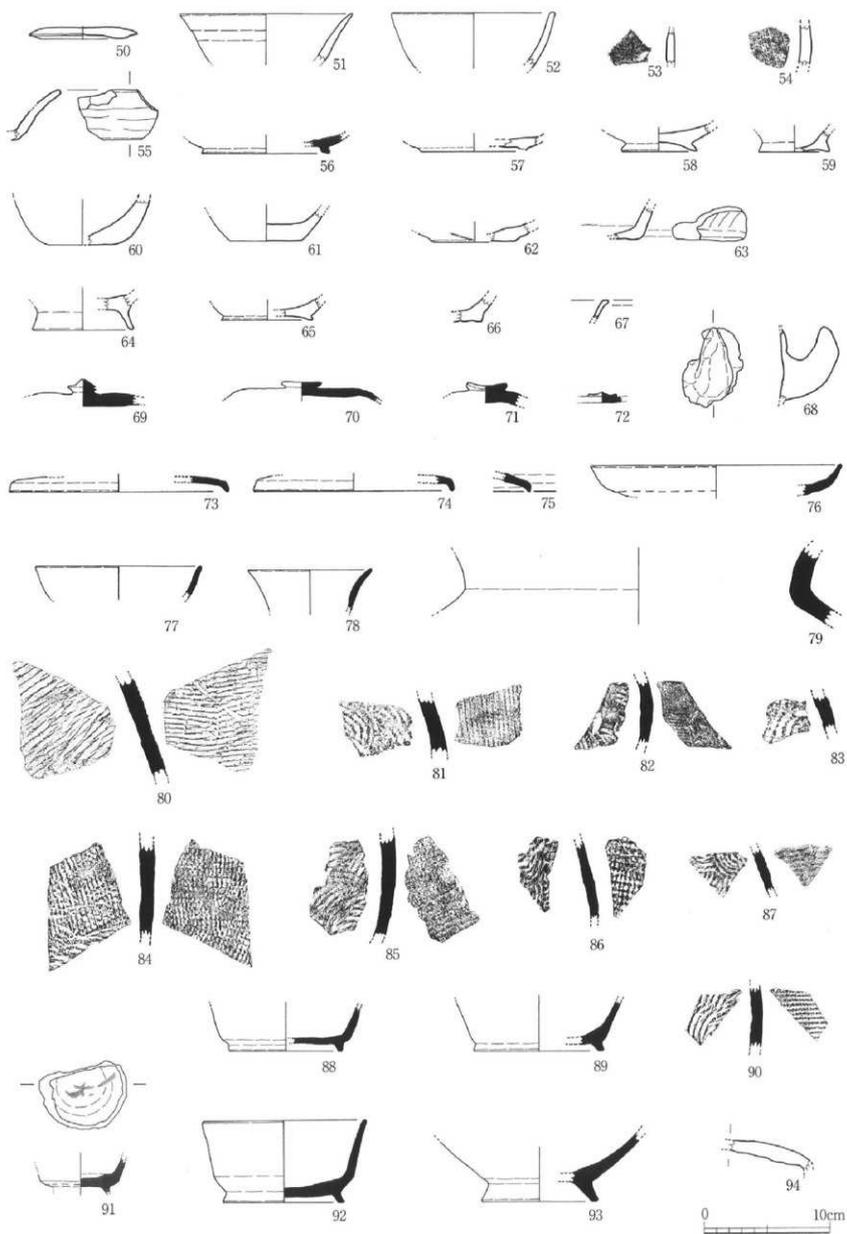
表3 SC06出土遺物観察表

B区の包含層検出遺物

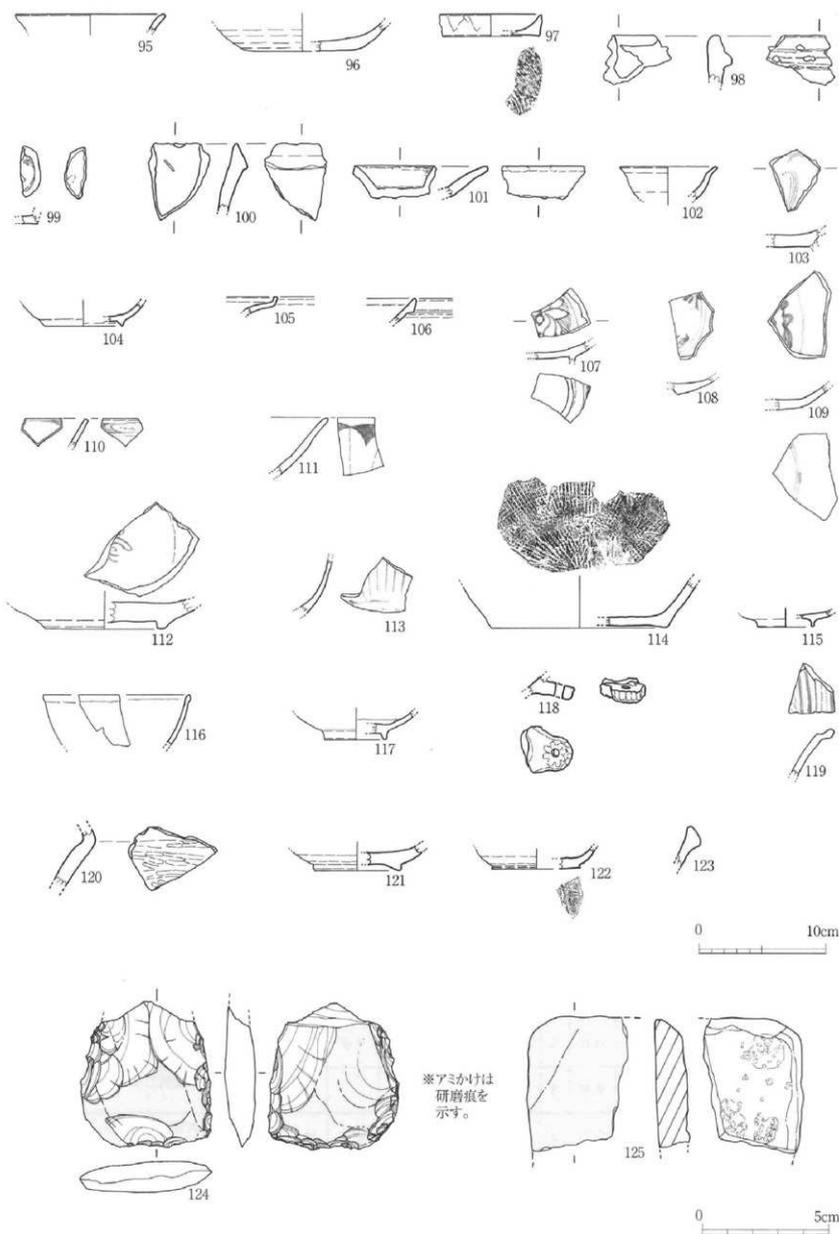
前述のとおり、B区包含層からは、幅広い年代の遺物を検出している。縄文・弥生期のものは数こそ少ないが、鱗状突起を持つ縄文晩期の土器（第19図、36）など特徴的なものもある。土師器・須恵器は、古墳時代から古代・中世にかけてのものが出土しているが、もっとも検出数が多いのは古代のものである。その中には、甌の牛角状突起（第20図、68）や、文字は判別できなかったが墨書と思われるもののある須恵器（第20図、91）、ほぼ完全な形で出土した須恵器の坏（第20図、92）などがある。その他、中世の遺物では、船載陶磁器の出土も多い（第21図）。近世の遺物は薩摩焼を中心とする国産陶磁器である。



第19図 B区包含層出土遺物実測図（縄文・弥生・古墳）



第 20 图 B 区包含层出土遗物实测图 (古代)



第 21 図 B 区包含層出土遺物実測図 (中世・近世, 石器)

番号	出土 地区	種別	器種	部位	層	色調		調整		備考
						内	外	内	外	
36	K 2 4	縄文	鉢	口縁	4	明黄褐	明黄褐			縄文晩期 口縁部に髑状突起。
37	L 2 5	弥生	甕	底部	4	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	
38	L 2 4	土師器	高坏	口縁	1	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	古墳 2破片を合成して図化。 (反転復元)
39	N 2 3	土師器	甕	口縁	4	橙	橙	ナデ	ナデ	古墳 外器面に指押えの痕跡有り。 (反転復元)
40	P 2 4	土師器	甕	胴部	5	にぶい橙	橙		ナデ	古墳 輪積み痕有り。(反転復元)
41	L 2 4	土師器	壺	底部	5	灰黄	にぶい黄褐	ハケメ	ハケメ	古墳 外器面にスス付着。2破片を 合成して図化。
42	Q 2 4	土師器	坏	底部	4	橙	浅黄橙	ナデ		古墳
43	N 2 4	土師器	甕?	底部	3	明黄褐	浅黄橙	ハケメ	ナデ	古墳 外器面に指押えの痕跡有り。
44	P 2 4	土師器		底部	2	黄灰	にぶい黄橙			古墳 底に工具痕有り。
45	G 2 7	土師器	甕?	底部	3	浅黄橙	にぶい橙	ケズリ	ナデ	古墳 (反転復元)
46	K 2 4	土師器	甕?	底部	3		浅黄橙		指押え	古墳 底に筆痕有り。(反転復元)
47	P 2 4	土師器		底部	3	黄灰	にぶい黄橙		指押え	古墳 底に工具痕有り。(反転復元)
48	O 2 3	須恵器	壺	口縁	3	灰	灰白	ナデ	ナデ	古墳 (反転復元)
49	表採	須恵器	壺	口縁		灰黄	灰	ナデ	ナデ	古墳
50	P 2 4	土師器	壺	口縁	4	淡黄	浅黄		ナデ	古代 (反転復元)
51	L 2 4	土師器	碗	口縁	4	浅黄橙	浅黄橙			古代 内外器面とも磨耗している。 (反転復元)
52	G 2 6	土師器	碗	口縁	4	明黄灰	黄橙		ナデ	古代 (反転復元)
53	O 2 5	土師器		胴部	3	浅黄橙	浅黄橙	布痕		古代 製造土器 類き不明。内外器 面とも磨耗している。
54	O 2 4	土師器		胴部	3	橙	にぶい橙	布痕		古代 製造土器 類き不明。内外器 面とも磨耗している。
55	L 2 5	土師器	坏	口縁	4	にぶい橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	古代 輪積み痕明瞭。
56	G 2 7	須恵器	高台付	底部	5	青灰	灰	ロクロ ナデ	ナデ	古代 (反転復元)
57	M 2 3	土師器	高台付 坏	底部	3	淡黄	淡黄	ナデ	ロクロ ナデ	古代 (反転復元)
58	P 2 4	土師器	高台付 碗	底部	3	浅黄橙	淡橙		ナデ	古代 内器面磨耗している。 (反転復元)
59	G 2 6	土師器	坏	底部	3	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	古代 底部剥落の可能性有り。 (反転復元)
60	L 2 5	土師器	甕	底部	3	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	古墳 (反転復元)

表4-1 B区包含層出土遺物観察表①

番号	出土 地区	種別	器種	部位	層	色調		調整		備考
						内	外	内	外	
61	L 2 4	土師器	輪	底部	3	浅黄橙	浅黄橙			古代 (反転復元)
62	O 2 4	土師器	坏	底部	3	浅黄橙	浅黄橙	ナテ	ナテ	古代 外器面に線刻?有り。 (反転復元)
63	P 2 5	土師器	坏	底部	3	浅黄橙	浅黄橙	ナテ	ミガキ	古代
64	L 2 5	黒色 土器	高台 付	底部	4	黒	浅黄橙	ミガキ	ナテ	古代 (反転復元)
65	F 2 6	黒色 土器	高台 付	底部	5	褐灰	浅黄橙	ミガキ	ロクロ ナテ	古代 (反転復元)
66	L 2 5	黒色 土器		底部	3	黒	浅黄橙	ミガキ	ロクロ ナテ	古代
67	B区 中央	土師質 土器	坏	口縁		橙	橙			古代
68	M 2 3	土師質 土器	瓶		3	にぶい橙	浅黄橙		ナテ	古代 牛角状突起
69	O 2 4	須恵器	壺	撮	4	灰白	灰白	ナテ	ロクロ ナテ	古代 (反転復元)
70	M 2 5	須恵器	壺	甲部	4	灰白	灰白	ナテ	ナテ	古代 (反転復元)
71	Q 2 4	須恵器	壺	撮	3	灰	灰	ナテ	ナテ	古代 (反転復元)
72	M 2 4	須恵器	壺	撮	5	灰	灰白		ナテ	古代
73	Q 2 3	須恵器	壺	口縁	3	灰白	灰	ロクロ ナテ	ロクロ ナテ	古代 (反転復元)
74	P 2 5	須恵器	壺	口縁	3	灰	黄灰	ナテ	ナテ	古代 (反転復元)
75	O 2 5	須恵器	壺	口縁		オリーブ灰	オリーブ灰	ナテ	ロクロ ナテ	古代
76	O 2 4	須恵器	壺	口縁	3	灰白	灰白	ロクロ ナテ	ロクロ ナテ	古代 (反転復元)
77	F 2 6	須恵器	坏?	口縁	3	灰白	明オリーブ 灰	ロクロ ナテ	ロクロ ナテ	古代 (反転復元)
78	O 2 3	須恵器		口縁	3	暗青灰	暗青灰	ロクロ ナテ	ロクロ ナテ	古代 (反転復元)
79	N 2 4	須恵器		胴部	3	暗緑灰	灰	ナテ	ナテ	古代 内器面下部に同心円の当て具 痕有り。(反転復元)
80	B区 中央	須恵器		胴部	3	にぶい赤褐	暗赤褐	当て具 痕	格子 タタキ	古代 焼成不良。傾き不明。
81	P 2 4	須恵器		胴部	3	橙	橙	同心円当 て具痕	平行 タタキ	古代 焼成不良。傾き不明。
82	O 2 8	須恵器		胴部	3	にぶい黄橙	浅黄橙	同心円当 て具痕	平行 タタキ	古代 焼成不良。傾き不明。
83	Q 2 4	須恵器		胴部	3	橙	橙	同心円当 て具痕		古代 焼成不良。傾き不明。
84	O 2 4	須恵器		胴部	4	にぶい赤褐	橙	同心円当 て具痕	格子 タタキ	古代 焼成不良。内器面は格子タタキ後、下 方に同心円当て具痕。傾き不明。
85	P 2 4	須恵器		胴部	4	浅黄橙	明黄褐	同心円当 て具痕	平行 タタキ	古代 焼成不良。傾き不明。

表4-2 B区包含層出土遺物観察表②

番号	出土 地区	種別	器種	部位	層	色調		調整		備考
						内	外	内	外	
86	S 2 4	須恵器		胴部		灰白	灰白	同心円出 て具痕	格子 タタキ	古代 焼成不良。傾き不明。
87	N 2 5	須恵器		胴部	3	赤灰	明褐色	同心円出 て具痕	平行 タタキ	古代 傾き不明。
88	E 2 4	須恵器	高台 付坏	底部	4	青灰	青灰	ロクロ ナア	ロクロ ナア	古代 (反転復元)
89	N 2 5	須恵器	高台 付坏	底部	3	灰黄	青灰	ナア	ナア	古代 (反転復元)
90	E 2 6	須恵器		胴部	1	黄白	褐色	同心円出 て具痕	平行 タタキ	古代 傾き不明。
91	O 2 4	須恵器	高台 付碗	底部	4	明褐色	灰白	ナア	ナア ケズリ	古代 磨き有り。
92	L 2 3	須恵器	高台 付坏	外形	5	浅黄橙	にぶい黄橙	ナア	ロクロ ナア	古代 はは完形で出土。
93	L 2 5	須恵器	高台 付碗	底部	4	青灰	オリーブ灰	ロクロ ナア	ロクロ ナア	古代 (反転復元)
94	B区 中央	灰輪 陶器	蓋	甲部				ロクロ ナア	自然輪	古代 接合はしないがA区より同一 個体と思われる破片を復出。
95	L 2 5	土師器		口縁	3	浅黄橙	浅黄橙	ロクロ ナア	ロクロ ナア	中世 (反転復元)
96	B区 中央	土師器	坏	底部		にぶい黄橙	にぶい橙	ロクロ ナア	ロクロ ナア	中世 底部切り離しは糸切り技法。 (反転復元)
97	G 2 6	土師器	小皿	底部	5	灰白	浅黄橙	ナア	ケズリ	中世 底部切り離しは糸切り技法。 (反転復元)
98	Q 2 3	石製品	石鍋	口縁	5					中世 滑石製石鍋
99	P 2 5	石製品								中世 滑石製品の破片の再加工作品。
100	B区	陶器	摺鉢	口縁						中世 備前焼 内器面に工具痕有り
101	U 2 3	陶器		口縁	5				施輪	中世 船載 内外器面とも貫入有り
102	T 2 3	白磁	碗	口縁	2				施輪	中世 船載 外部面下部は無軸。 (反転復元)
103	浜採	白磁							施輪	中世 船載 磨き紋。裏面の大部分 は剥離している。
104	E 2 6	白磁	碗	底部	1				施輪	中世 船載 (反転復元)
105	D 2 7	白磁		口縁	1				施輪	中世 船載
106	G 2 6	白磁		口縁	3				施輪	中世 船載
107	B区	柴付	皿	底部					施輪	中世 青花
108	B区 中央	柴付	皿	胴部					施輪	中世 青花 外器面下部は無軸。
109	B区 東部	柴付	皿	胴部					施輪	中世 青花
110	B区	柴付	碗	口縁	3				施輪	中世 青花

表4-3 B区包含層出土遺物観察表③

番号	出土 地区	種別	器種	部位	層	色調		調整		備考
						内	外	内	外	
111	表採	青磁	碗	口縁				施釉	施釉	中世 船載 しのぎ濺舟紋
112	B区 中央	青磁	皿	底部				施釉	施釉	中世 船載 (反転復元)
113	U 2 2	青磁	鉢	胴部	2			施釉	施釉	中世 船載 雲舟紋
114	L 2 4	陶磁器	播鉢	底部	3					近世 備前焼
115	B区	陶磁器	碗	底部				施釉	施釉	近世
116	U 2 3	陶磁器	碗	口縁	3			施釉	施釉	近世 薩摩焼
117	B区	陶磁器	碗	底部				施釉	施釉	近世 薩摩焼
118	O 2 4	陶磁器			3					近世 備前焼
119	O 2 4	陶磁器		口縁	3			施釉	施釉	近世
120	表採	縄文		胴部		にぶい場	にぶい橙	ナア	ミガキ	縄文後期
121	表採	土師器	高台 付杯	底部		灰白	灰白		ロクロ ナア	古代 内器面磨耗している。 (反転復元)
122	表採	土師器		底部		浅黄橙	浅黄橙	ナア	ナア	中世 底部切り難しは糸切り技法。 (反転復元)
123	表採	須恵器	鉢	口縁		黄灰	黄灰	ナア	ナア	中世 東播系
124	M 2 4	石器								研磨痕有り。
125	B区 西部	石器								研磨痕有り。

表4-4 B区包含層出土遺物観察表④

第4章 おわりに

今回の調査は細長い限られた区域であったが、大規模な溝状遺構やそこから出土した木製品など大きな成果を上げることができた。ここでは、当地域の歴史的環境を考えた上で当遺跡について考えてみたい。

当遺跡の北西約1kmには本市の地名の由来となった都之城跡がある。都之城は1375年、北郷義久が築城したと云われるが、それ以前も宮丸藏人道時の居城であったといわれている。この城は1615年の一国一城令で廢城となり、その政治的機能を領主館（現、都城市役所付近）に移している。また、当遺跡の東を流れる萩原川と大淀川の合流点の下流、現在の岳下橋（第1回参照）付近には、寛政年間（1790）に大淀川を利用して今の宮崎市近辺まで物資輸送を行っていた通船方があり、船問屋、船頭小屋、積込場、倉庫等も並んでいた。第2章で紹介した大岩田村ノ前遺跡では、その維持・管理にはある種の権力の存在を窺わせる、中世の大規模な道路状遺構が検出されている。このように当遺跡のある地域は、中世から近世をへて現代にいたるまで、都城盆地の政治・経済の中心である。中世以降のこのような状況を鑑みるに、この地は早くから人の生活圏として確立しており、やがてその地理的条件から人々の営みの中で中心的役割を担うようになっていったものと考えられる。当遺跡で出土した幅広い年代層を持つ遺物と遺構は、こうした人々の日々の営みの中で使用されたものではないだろうか。

最後に、調査及び報告書作成にあたり、基本的な点から丁寧にご教示・ご指導して頂いた、矢部喜多夫・柴畑光博・下田代清海・横山哲英・米澤英昭各氏に心からの感謝の意を表します。

<参考文献>

- 大川清 他 『日本土器事典』 雄山閣 1996
玉口時雄 小金井靖 『改定新版 土師器・須恵器の知識』 東京美術 1998
田中琢 出辺昭三 『日本陶磁全集7 須恵器』 中央公論 1980
宮崎県教育委員会 『宮崎県歴史の遺調査報告書 薩摩街道』 1979
都城市史編さん委員会 『都城市史 通史編 自然・原始・古代』 都城市 1997
都城市教育委員会 『都城市文化財調査報告書 第7集 松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』 1989
都城市教育委員会 『都城市文化財調査報告書 第17集 大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』 1991
都城市教育委員会 『都城市文化財調査報告書 第23集 黒土遺跡』 1994
都城市教育委員会 『都城市文化財調査報告書 第56集 桑原遺跡』 2002



A区遺構検出状況（北西から）



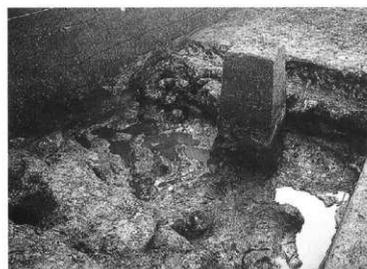
B区中央部遺物出土状況（南から）



B区中央部遺構検出状況（南東から）



SD01完掘（北から）



SD01北側完掘（南西から）



SD01木製品出土状況



SD03・04・05完掘（南東から）



SD06完掘（東から）

図版 2



SD07完掘 (東から)



SD08完掘 (南から)



SC01完掘 (南西から)



SC02完掘 (西から)



SC03完掘 (西から)



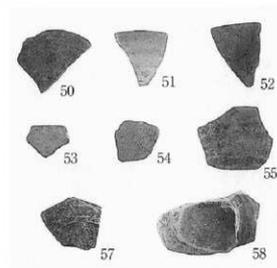
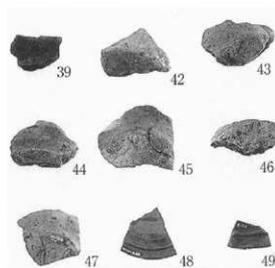
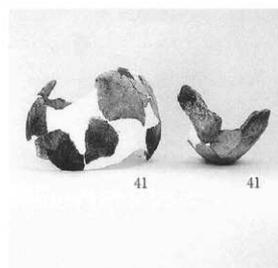
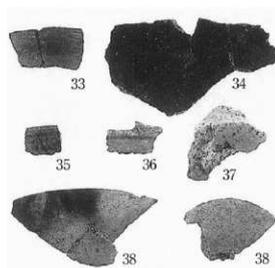
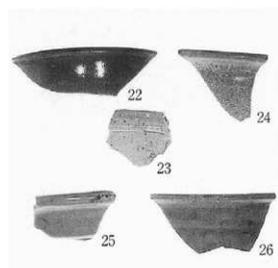
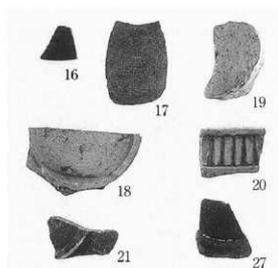
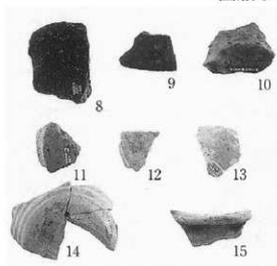
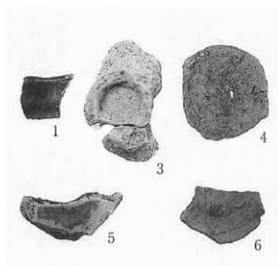
SC04完掘 (西から)



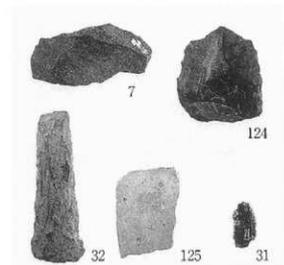
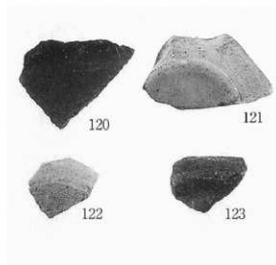
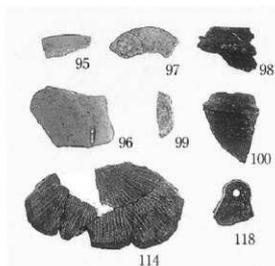
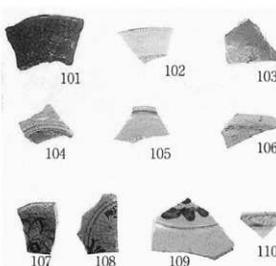
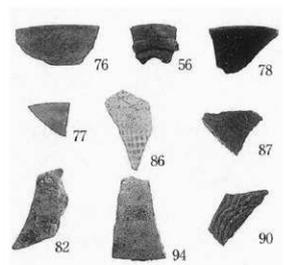
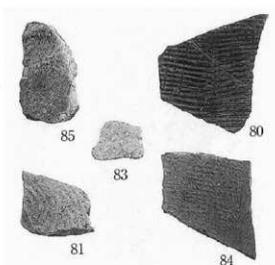
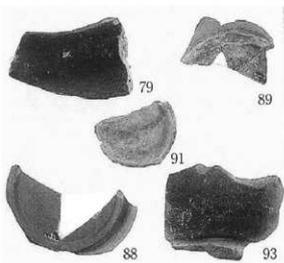
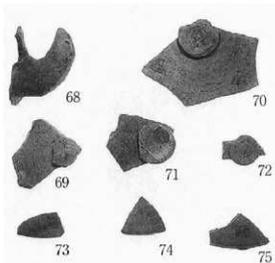
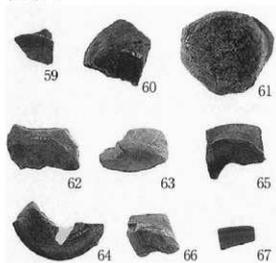
SC05完掘 (西から)



SC06完掘 (西から)



图版 4



報 告 書 抄 録

フリガナ	キノマエイセキ					
書名	木ノ前遺跡					
副書名	民間大規模小売店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第63集					
編集者名	久松亮					
発行機関	都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	2004年3月					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
キノマエイセキ 木ノ前遺跡	宮崎県 都城市 下長飯町261番地 ほか	31° 42' 23' 付近	131° 3' 37' 付近	2001年 12月28日 ～ 2002年 2月28日	約1,500㎡	大規模 小売店舗 建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
集落跡	縄文・古墳 古代～中世 近世	溝状遺構 掘立柱建物跡 土坑		土陶器・須恵器 陶磁器		溝状遺構より木製品 (下駄) 出土

都城市文化財調査報告書第63集

木ノ前遺跡

2004年3月

編集 宮崎県都城市教育委員会
発行 〒885-8555 宮崎県都城市姪城町6街区21号
TEL(0986)23-9547 FAX(0986)24-1989
印刷 有限会社 都城新生社印刷
〒885-0004 宮崎県都城市都北町7284-1
TEL(0986)38-3500 FAX(0986)38-4187